

情報化社会論の構図とその妥当性をめぐって —H.L.Dreyfusの議論を参照項として—

A Framework of the Information Society Studies —An Approach Based on Dreyfus's Thought—

河井 延晃
Nobuaki KAWAI

Abstract

This paper discusses a framework of the information society studies. In the process of IT or ICT, these discussions are disputative between dystopian and utopian in recent years. Dreyfus regards information technology as western rationalism and metaphysics. In the course of the premise, it follows that Information Society is pessimistic and his thought has a few implication. This paper regards his thought as insightful, but it should be criticized in the context of today media studies and the social acceptance of technology.

キーワード：情報社会論, 技術の表象性, 普遍主義, インターネット, 情報検索

Key Words：Information Society Study, Representation of Technology,
Universalism, Internet, Information Search

0. はじめに 背景と目的

1. H.L.Dreyfusの議論を参照項として コンピュータには何ができないか
 - 1-1. H.L.Dreyfusの人工知能批判をめぐる考察
 - 1-2. 近代科学論への視点 より広範な文明論、社会論的洞察へ
2. H.L.Dreyfusの議論の現代的射程 インターネットには何ができないか
 - 2-1. インターネット批判と身体
 - 2-2. ポストモダニズムへの批判妥当性 脱形式主義への視点
 - 2-3. 検索技術をめぐる形式主義への批判妥当性 普遍主義と草の根活動
3. メディア技術の特性 技術論の特殊としてのメディア研究
4. 結論と展望

0. はじめに 背景と目的

かつてのニューメディア、マルチメディア論を経て、近年ではITやICTの普及とともにこれらの技術やメディアに関する議論が多くなされてきた。これらの言説には技術受容の社会的実態とも関連してさまざまな期待や不安が提起されており、これらをめぐって様々なユートピア／ディストピアの構図が顕在化してきた。本論ではかつて存在論的(ontological)な観点から人工知能技術を批判し、さらに現代においてはメディア技術を批判するドレイファス(H.L.Dreyfus)の議論を参照項としつつ、現代的なコンテクストに即して今日のIT化やICTへの考察を進める。一般に技術中心的な楽観論(それは政治的な立場を内包する)に対し、人文・社会学的な伝統(それは思想や哲学を標榜する)はこれらを批判するが、本論ではドレイファスの技術観や文明論的な洞察を手がかりとしつつ、それらにおいて顕在化しつつあった対立図式そのものを微視的な次元から対象化する必要があると考える。これは、かつてのドレイファスの技術批判を現代の水準において評価し、その議論の射程を測ることでもある。現代の情報化は純粋に技術的な困難さのみで未来社会を予期することはこれまで以上に困難である。様々な意図と利害を含んだ組織物としての情報化技術に対し、技術を人間疎外の要因とみなす技術批判以外にどのような展望やコンセンサスを獲得し、情報化社会を構想することが可能なかを模索するためのひとつの考察として本論は構想した。

1. H.L.Dreyfusの議論を参照項として コンピュータには何ができないか

1-1. H.L.Dreyfusの人工知能批判をめぐる考察

ドレイファスは哲学的な視点から諸々の情報技術に対して批判を加えており、その後も継続的に考察を行っている。もはやそれは単に一工学技術の批判というよりも、文明論的、科学技術論的な洞察を含みつつ、果敢に現代の情報化社会へアプローチを試みつつあるようにみえる。しかし、それらの様々な議論を参照する前に、このような議論の前提となるドレイファス自身の前提とはどのようなものであったかを、以下で最小限確認しておく。実際、ドレイファスの思想の根幹をなす部分は今日においてもほとんどぶれることない。そのためドレイファスの近年の作業を評価する際にも、かつての議論を経由するほうが近道とすら言えるからである。

ドレイファスの初期の議論は『コンピュータに何ができないか 哲学的な人工知能批判』に集約される。本論自体が後に様々な批判を浴びて改訂されるものの、問題意識が最初に著述の形式で公刊されたのは人工知能研究が計算機科学とともに発展しつつあった1960年代である。当時はコンピュータサイエンスが世界大戦を経て戦時中の軍需産業のみならず、新しいフロンティアを求めて様々な模索をおこなった時期であった。特に、戦勝国ともなるアメリカにおいては、思想的にもドイツ観念論を乗り越えようと企図したホワイトヘッドやその影響下にあるベイトソン、ベルタランフィの一般システム論に見られる学際的で包括的な学問体系を求める機運も手伝って、システム思想の発展が目覚ましい時期でもあった。なかでも計算機科学の発展に大きく寄与したサイモンによって示されたシステム科学は大きな影響を与えたと言えよう。

こうした機運や期待の高まりをみせた60-70年台にドレイファスはまさに時宜を得た批判をおこなっている。議論を手短に確認しておく、次のようなものである。ドレイファスはデジタルコンピュータによって試みられる「人工知能」を西洋形而上学的な前提に基づいてるとする。ホワイトヘッドが西洋の哲学を「プラトンへの脚注」であると表現したように、ドレイファスはプラトン以降の伝統的西洋哲学が前提してきたこのような知識観を批判する。そして、そうした伝統的な知識観のもっとも徹底された形態こそサイバネティクスであるとみなす。

「プラトンによれば、すべての知識は誰もが適用できる明示的定義の形で述べることができなければならない。そのような明示的命題によってノウハウを述べるできない場合、つまり方法を知ること (knowing how) を内容を知ること (knowing that) へと変換できない場合には、その知識は真の意味の知識ではなく単なる信念なのである。プラトンによれば、例えば舌と勘で料理するコックや閃きで詩を書く詩人は、知識をもっていない。彼らのしていることは理解とは関係がないので、理解することは不可能である。(中略)

しかし、プラトンはまだ完全にはサイバネティクス論者ではなかった。(ただレウィーナーによれば、プラトンがこの用語を用いた最初の人物であるが)。なぜなら、プラトンは統語論的基準ではなく、意味論的基準を探していたからである。」⁽¹⁾

AI研究に代表される知識工学は70-80年代を境に徐々に様々なボトルネックやアポリアを抱えてゆくこととなる。ドレイファスによれば、人工知能の実際の開発は二段階に分けて把握される。第一期の1957-1962年、第二期の1962-1967である。第一期はGPSの放棄と期待された定理証明プログラム、チェス・プログラム、機械翻訳プログラムなどの工学的な技術を失敗として説明しており、それに続く第二期をミンスキーをはじめとするMITでの「意味情報処理」アプローチとして位置づけている。こちらの第二期についてもドレイファスは様々な報告書をもとに実質的な成果がないことを批判する。人工知能擁護派の論者によっては「単純に計算機の計算速度により解決される」という楽観的、技術主義的なものも存在したが、ドレイファスのような哲学的次元から、技術が背負う世界観や知識観を批判するものも登場した。こうした問題そのものはドレイファスのような立場からは「人工知能技術が内在的に抱えていたもの」であり、ドレイファス自身の議論も影響を与えることとなった。しかし上記のドレイファスの記述にもある通り、当時のAI研究の根底には西洋的な理性中心主義が横たわっており、それはプラトン以上にプラトニックなプラトニストとして指摘されている。こうした議論は大きな波紋を呼ぶこととなり、またそれに応答するために、ドレイファスは『コンピュータには何ができないか』を改訂してゆくこととなる。

現代の視点からその後の発展を含めて評価しても、ドレイファスの批判はおおむね正鵠を得ている。さらに、人工知能研究はドレイファスの批判を経てもなおこの後、日本も含めて波及してゆくこととなる。⁽²⁾

この様な高度に社会化された巨大科学技術の発展においては、単に技術そのものの評価（ここでは人工知能が技術的に実現可能か否か）という問題だけではなく、技術がヘゲモニーを掌握する際の政治性や倫理性が問われることもままあった。サイバネティクスの父とも目されるウィーナーが、かつてその著作で再三繰り返し批判したマッカーシズムのような科学技術者像はまさにこのような政治性に対して宛てられたものであった。⁽³⁾

ただし、そうした時代と年月を経てもなお、GPSの様なきわめて汎用性の高いシステムは工学的な成果として、つまり人工知能が実現されることはなかった。今日では知識工学などにおいて「フレーム問題」として定義されるように、ここには機械に問題そのものを設定させたり、問題を理解させることはほとんど挫折せざるを得なかったからである。「フレーム問題」は、我々が日常的に行っている行為として説明されるものであり、熟考を要する問題というよりも「常識的な」行為として把握されるものである。

なお、ドレイファスの議論から少し逸れるが、一般的（general）な問題解決が挫折しつつあるなかで、限定的（specific）な状況でコンテキストの揺らぎが最小限に抑えられる状況を想定したシステムはその後もそれなりに発展した。たとえば、エキスパートシステムは専門家が補助的なデータベース代わりに使用するのには有用である。また専門家でなくとも、翻訳ソフトの機械的な置換程度の直訳を読んで、逆に原文の文法が予測される程度に冗長に対応できる者に対しては便利な技術となっている。現代では、安価に購入できる翻訳ソフトなどがあふれているが、いずれも人間側の「割り切り」や「折り合い」を前提とするならば有用な技術である。

逆に前提知識を有さないまったくの初心者が懇切丁寧な熟練した医者や、にこやかで経験豊富なツアーコンダクターや通訳の対応を期待するとその期待を裏切られる。その様なコミュニケーションに際しての「常識」や「冗長性」こそ、人工知能開発のボトルネックとなったものだからである。このように技術と人間との関係性（これ自体が社会通念や常識である）は徐々に変容しつつあるが、現代の技術趨勢のみを取り出してドレイファスを評価・批判することもあまり意味があることではない。次では、ドレイファスの提起した文明論的、科学技術論的に深遠な問いかけにまで遡行してゆくこととする。

1—2. 近代科学論への視点 より広範な文明論、社会論的洞察へ

ドレイファスは人工知能批判に際して、その知識観や世界観そのものを根底から批判した。その際に批判の矛先は近代科学そのものにまで向かうこととなる。

「人工知能の全分野を悩ませている厄介な困難が、失敗として解釈し直されるならば、これらの失敗は、心理学的、認識論的、存在論的前提のすべてに対する経験的証拠として解釈されなければならない。ハイデガーの言葉を借りて言えばこうなる。西洋の形而上学がサイバネティクスにおいて頂点に達したとすれば、人工知能における最近の困難は、工学的限界（technological limitations）を反映しているというよりも、むしろ科学技術そのものの限界（the limitations of technology）を浮かび上がらせているのである。」⁽⁴⁾

こうした主知主義的、または行動主義的な「プラトンの還元主義」に対し、ドレイファス自身はハイデガーやメルロ＝ポンティの現象学、そしてマイケルポランニーらのような知識観を提示する。一例として「ゲシュタルト知覚」を挙げ、図と地の反転を例に「全体は部分によって（その単純な総和として）規定される」のではなく「全体によって部分が定義される」事を示し、要素還元や要素の総和としての意味解釈に対する批判をおこなっている。なかでも次のような記述においてドレイファスの立脚点をひとまず明確に把握することができる。

「フッサールのような超越論的現象学者は、人間の複雑なパタン認識が、予期される経験によって後から徐々に充実されていくような、いくらか不確定の全体を投影することによって行われると指摘している。メルロ＝ポンティのような実存主義的現象学者は、人間の複雑なパタン認識の能力を、動的で有機的に結合しあった人間の身体に関係づける。この身体は、それ自体の機能と目標についてのある継続的な感覚によって環境に反応するよう設定されているのである。

パタン認識がすべての知的振舞いの基礎となる身体的技能であることがわかった以上、人工知能が可能かどうかという問いは、身体を持った人工行為者が可能かどうかという問いにまで収斂する。」⁽⁵⁾

この様な記述から、ドレイファスの批判対象として近代科学批判の側面が強いことは言うまでもない。さらに、ここではまさにそのような科学批判の一形態として「ヨーロッパ諸学の危機」を指摘し、その基礎付けの学として構想したフッサールらの立場も含めて批判に晒されている。これは超越論的な立場に対する批判であり、結果としてドレイファスはこのような立場も含めて乗り越えようとしたハイデガーからメルロ＝ポンティに至る存在論やその後の現象学に大きく依拠していることが伺える。

ドレイファスの議論を超えて、このような知識観を現代において評価すると、ロボット工学は目覚ましい発展を遂げつつあるようにも見える。このようなアプローチのもとでは、コンピュータは単なる箱ではなく、環境とインタラクションを行うインターフェイスである手足も有しており、今日では人や動物、昆虫に似せた行動をおこなう様々な示唆を与えるシミュレーションがなされている。

嘗ての人工知能研究からすると、この様な今日の工学的アプローチが身体の問題機制について共有する部分も多い。しかし、ドレイファスにとっては現在のデジタルコンピュータを利用する限り、人間のような知的振る舞いを実現することは不可能に近い。結局のところドレイファスはその著述において人工知能の成果をきわめて限定的に評価するにとどまる。⁽⁶⁾

2. H.L.Dreyfusの議論の現代的射程 インターネットには何ができないか

2-1. インターネット批判と身体

先に示したように、ドレイファスの批判はラディカルであるがゆえに、批判対象においてはどこにも救いのない状況に位置付けられがちであった。しかし、かつてのブームが沈静化した

現在では、ドレイファスも冷静に本論で挙げた合理主義、還元主義的な人工知能アプローチやそれと双壁をなした全体論的なニューロサイエンスの問題構成に一定の評価を行っている。さらに人工知能研究の関連領域まで含めて評価をしても、ドレイファスが認知心理学、認知科学、認知工学といった領域の発展に寄与したことは間違いない。⁽⁷⁾

それとあわせて、前章では簡単にドレイファスの嘗ての人工知能批判から、技術観や文明論的な洞察へ至る流れを確認した。このような哲学や思想を背景にドレイファスは様々な論述を残しているが、アメリカの研究者としては異例とも言える形で独自にハイデガーを解釈し「世界内存在」という概念で議論を行っている。この様な議論に際しても、かつての議論を想起させるコンピュータ関連の記述なども確認されるが、たとえばその著作である『世界内存在』そのものがかつての議論に援用の多かった現象学に依拠したものである。ここにはドレイファスの一貫した態度が読み取れる。

また、『ミシェル・フーコー 構造主義と解釈学を超えて』においては、認知科学や社会生物学をはじめとした「人間や生へのまなざし」をフーコーに依拠しつつ論じている。いずれの立場も英語圏の哲学者としてはやや破格ともいえるが、こうした作業は当初の「技術批判」という枠を超えて、「文明論的」ないしは「社会論的」な色彩をより強めてゆく。

この様なやや哲学寄りの議論を経ながらも、メディアや技術論からは遠ざかることなく、近年では『インターネットについて 哲学的考察』として電子メディアを論じ、インターネット社会の批判を行っている。本論では前章で確認したドレイファスの前提を踏まえつつ、これらのネット社会論を評価することとする。

ドレイファスの議論は序論と結論を除けば四つの章で構成されている。

「第一章 ハイパーリンクに関する誇大宣伝」

「第二章 遠隔学習は教育からどれくらい遠いか」

「第三章 身体を欠いたテレプレゼンスと現実の遠さ」

「第四章 情報ハイウェイのニヒリズム。現代における匿名性とコミットメント」

個別のテーマは異なるように見えるがどれも電子メディアと身体性が鍵となる。まず、「ハイパーリンクに関する誇大宣伝」はウェブ検索技術を「形式的で統語論的な技術を使って、無意味な記号処理」であるとみなし、本論でも確認したようなかつての人工知能研究と比較する。人工知能の前提した知識観を再度詠唱しつつ、情報検索の研究者が人工知能に目を向け始めた契機を指摘し、ハイパーリンクにより表現される知識構造について批判を行う。ドレイファスはその一つとして、CYCを挙げる。CYCは常識的データベースであり、常識的知識を大規模に構築してゆくものであった。常識的な知識とはまさにメルロ＝ポンティらを引用しつつ論じていた、世界についての身体的知識なども含まれる。当然、こうした技術が知識の記述可能性という点から挫折へ至ることは想像に難くない。ドレイファスの批判はさらにその先に向かう。

「しかし仮に、われわれが身体的に理解していることのすべてが明示化され、CYCのデータベースに登録されたとしよう。だがその場合でも、世界のある変化によって、データベースのどのような変化が必要となったのかをつねに知っておかなければならないという、より一般的な問題が残ることになる。」⁽⁸⁾

ドレイファスは技術的な困難さだけでなく、その技術が開発されて広範に社会へ普及してゆく際のプラグマティックな視点で批判を加えている。⁽⁹⁾

ウェブ技術が扱うことのできる知識やその構造は技術的にはドレイファスの指摘どおりである。しかし、社会化された技術やメディアをよりプラグマティックにみる場合、果たしてこうした議論はどの程度まで妥当性を持つのであろうか。

人工知能研究と検索技術の類似性や親和性については、確かに否定が難しい。ドレイファスは「情報検索の技術者は人工知能に目を向けた」と指摘するが、むしろ現代の優秀なウェブ技術開発者として活動をしている者のなかには、かつての優秀な人工知能研究者も多く含まれる。

しかし、技術が受容されてゆく際の社会的通念や常識変化にまで目を向けるなら、たとえばドレイファスの議論をウェブ制作者の視点から見たとき、違和感をとおり過ぎてやや滑稽に映りかねない記述もある。人工知能において、ドレイファスが批判を開始した当時のコンピュータリソースは当時の技術的な背景を考慮すると、当時はメインフレームに代表される計算機が大きな位置を占め、コンピュータリソースはきわめて貴重な時代であった。利用用途も誰でもどこでも使うことのできるものではなく、物的、経済的、技術的な様々な制約が伴った。人工知能の開発に際してはその前提に知識ベースやモデルに従って、ほとんど無謀と思われる知識の構造化（デジタル化）がなされた。それは、ドレイファスに言わせるなら「挫折せざるを得ない」「失敗を運命付けられた」試みであったといえよう。

しかし、現代では一人一人がまさに個人のものとしてコンピュータを利用することができ、ラップトップパソコンやさらに小型のネットブック、携帯電話など複数の計算機を所有することも別段珍しくない。こうした情勢からコンピュータに対する理念もやや異なっていることに配慮する必要がある。一般に理解されるように、インターネットは「ベストエフォート型」の技術であり、そのコンテンツも「誰でも情報発信できるメディア」として90年代に普及した精華である。つまり、インターネットメディアのマス化ともいえるが、その理念や当初の目論見はどうであれ、既存のマスメディアと異なり専門家によって品質が担保されることもない。この様なウェブの実態として理念や理想は散逸しつつも、日々総体は膨らみ続けるという状況になりつつある。もはや、目標すら共有されない「未完のシステム」であり「永遠のベータ版」として作動している。

この様な技術-社会的機制を顕在化させつつある現代のインターネット技術に対し、ドレイファスの批判対象に前提されている「段階的な進歩」や「超克史観」を押し付けることは相当な困難が伴うはずである。

「まさに必要としている資料を、そして必要としている資料だけを検索することができるということに向かって段階的に進歩しているのだという信念は、実際には、アリストテレスの分類法やデューイの十進分類体系といった、世界を分割するための唯一の分類法があつてはじめて意味をなすものである。」⁽¹⁰⁾

上記のようなドレイファスの言明について、そこでも違和感を持つのは、一つはこのようなりニアな超克史観がインターネットのウェブ製作者、閲覧者どちらかにでも共有されているのであろうかということである。そして、そのような合理化、形式化が既存の分類法に依拠するものであるのかどうかとも疑問が生じる。もはや、ウェブコンテンツの担い手は、生真面目な人工知能研究者ではなく、その内容に至っても誰も統制しえない状況が社会的普及とともに顕在化しつつある。

2-2. ポストモダニズムへの批判妥当性 脱形式主義への視点

ドレイファスが現代のネットワーク社会を論じる際に生じている盲点は、「人間と技術の間でどのような了解がなされつつあるか」でありこれはあとで示す技術の表象的側面である。人工知能はかつてのGPSに代表されるような壮大な目論見は潰えたかもしれない。しかし、ウェブ検索技術がそうした技術の焼き直しであるとしても、もはや技術者はかつてのような生真面目で愚直なメンタリティは持ち合わせていない。それどころか、人工知能の開発は知識ベースの構築を含めての一貫した作業を含んでいたが、ウェブ検索においてコンテンツはコントロールできない（たとえば、検索サービスで有名な google 社は、むしろ積極的な意味でコンテンツ作成にはコミットしないというポリシーを貫いているかにみえる。）

このような形式化への批判の帰結は次のようなものである。

「身体を捨て去り、統語論的なウェブクローラーやサーチエンジンに依存するようになったネットユーザーたちは、自分が望む情報を見つけることもたまにはありそうだという希望を胸にしなが、成長するウェブジャンクの山をかき分けてひろっていくはめになるだろうということである。」⁽¹¹⁾

このような議論の妥当性をメディア研究の立場からみると、ドレイファスはあまりに「制度」と「技術」を混同しており、さらにスタティックに考えている。

たとえば、デューイの十進分類法をアリストテレスの分類法の延長上にみなしているが、図書館運営そのものがこのような形式主義に常にしたがっているわけではない。現在では図書館自体も目的性を有したユニークな専門図書館があるし、目的にあわせて特別に開架コーナーを設けたりなどの工夫がされている。また、近年議論されてきた「電子図書館」などの登場が、デューイ的な意匠をどこまで残しているのか、「制度」が「運用」される際のその「脱形式主義的」な特殊性や展望には触れてない。

ドレイファスに従うならば電子図書館もコンテンツを含む (full text) データベースであり、結局のところ形式化の問題は言語による記述による以上避けられないものとなる。しかし、言

語による制約や限界の強調に依拠する批判手法そのものの既視感も避けられない。言語と世界の関係について、ドレイファスは明らかに言語論的転回の影響を受け継ぐ研究者である。つまり、世界があり言語によって記述されるのか、言語によって世界が立ち現れるのか（言語学的転回）と、二つの選択肢を用意するなら、ドレイファスは後者の立場であろう。しかし、ことさらに言語による知識の形式化の不可能性を指摘する立場は、どこか批判対象であった形式主義者の前提に近いものとなりつつある。

ましてや、嘗ての批判対象が消滅しつつある現在、合理性を批判することで合理性をむやみに召喚しつつある。つまり、ミイラ取りがミイラを狩りつくした帰結として、自分がミイラに陥っている観が否めない。これは、近代の合理性を極端に記述し、合理性を批判し解体すると称する極端なポストモダニストと同類である。ところが、ドレイファスはポストモダニストにも微妙な立場をいくつもの箇所では表明している。

「ウェブ・サーファーたちは増殖する情報を新たな生活様式に役立つものとして喜んで受け入れる。この新たな生活様式では、意味と有用性よりも驚きと驚異の方が重要なのである。こうしたアプローチは、関連性のある情報を探すという実践的な問題に関わり合う必要がなく、かつ、ヒエラルキーと権威を拒絶したがる人たちにはとりわけ魅力的なものである。そうしたわけで、ポストモダンの理論家や芸術家たちは、ハイパーリンクを匿名の専門家たちから開放してくれるひとつの方法として歓迎するのである。」⁽¹²⁾

2-3. 検索技術をめぐる形式主義への批判妥当性 普遍主義と草の根活動

既にウェブにおける検索技術はエージェント技術などを含めてもきわめて洗練されているが、呼び出し率（recall）と適合率（precision）のジレンマを根本的に解消することはドレイファスの指摘どおり非常に困難である。しかし、現代の情報技術がセマンティックな処理を技術的に行うことを挫折せざるを得ないことは、「積極的な意味で計算機では「意味解釈」を扱わない。」という立場から認知工学などの潮流に結実している。良くも悪くもこれほど、割り切った思想的な立場（ドレイファスはこれを「アメリカ的」と表現するであろうが）に対し、形式主義や身体性の欠如を提示して批判することはドレイファスの立場を独特のものにしている点でもある。

理解に苦しむことは、なぜWebでそれほどまでに身体性を求めるか、なぜ身体性によって批判するのかということである。これに続く議論においては、身体を欠き、匿名性のもとにコミットメントを伴わないインターネット技術が、かつてキルケゴールが指摘した新聞と世論に対する批判によって先取されていたとする。これが、知識の形式主義的な構造化批判であることはもはや言うまでもないが、人工知能と異なりウェブにおいてはその知識化、構造化においてすでに混沌とした状況である。こうした混沌とした状況になった理由は、Webの「誰でも情報発信」という性格上不可避である。むしろ、こうした問題が取り巻く今日的な技術的、社会的動向について、以下で詳述しておく。

ウェブの記述に利用されるHTMLはその起源をXMLやSGMLに置くことから、データベース技術とは非常に親和性の高い構造化言語であった。しかし、HTMLはこうしたSGMLや純粋なプログラミング言語と異なり、シンタックスレベルでエラーがあっても「とりあえず」表示はされることが多い。実際、世界中の様々なウェブサイトにおいて、こうしたHTMLの規則を完全に守っていないウェブサイトは散見される。ウェブのレンダリングを含めて考えると、HTMLの解釈はさらに問題を抱えている。ブラウザ戦争の中でのコーディングエンジンの強引な独自仕様、オーサリングソフトの独自解釈など、技術的一貫性はむしろ低かったといえる。つまり、「製作者側（誰でも発信）」、「閲覧ソフト側（仕様はそれぞれ独自）」、「製作ソフト側（仕様は独自）」それぞれが独自の形式化を行い、そしてそれが三位一体となって混乱を引き起こしていたのが実際である。（これは、人工知能における知識ベースの開発や図書館のOPACシステムとは根本的に異なる。端的に言っても、図書検索システムは仕様を厳密に決めた上で運営される。それぞれの項目は専門家によって分類法に従って区別される。）

そのためWeb standards（ウェブ標準）という概念が徐々に浸透しつつあることは看過できない。⁽¹³⁾ これは嘗てのブラウザ戦争のなかで、独自の拡張、解釈が氾濫してしまい、それに対処するために草の根集団によって推進・提唱されたものである。ドレイファスが言うような西洋形而上学に従ったり、超越論的なものではなく、また市場に任せたデファクトスタンダードありきでもない。⁽¹⁴⁾

ウェブ上のデータ形式をタグに従って指定することで、テキストブラウザや音声ブラウザなどへの対応などがあるが、さらに検索技術と親和性を高めた、Semantic Webへの対応なども背景にある。読み上げ技術は視覚障害者に配慮した機能であるが、この技術は人間が言語を発するような、文章内容の理解を伴った技術ではない。また、Semantic Web自体も、コンピュータに意味内容を理解させるという、大胆な目論見ではない。エレガントな技術というよりも、むしろ苦肉の策としての草の根活動と結びついている。ウェブ標準の様な草の根活動をみると、何よりドレイファスの考え方ではWebでは他のメディア以上に送り手にもなりうるという可能性、そして自らがそうした秩序を作れる可能性を無視している。（Webをテレビの延長のように受動的なメディアとして考えている。）

また、インターネットを全体として捉えようとするあまり、微視的な技術の社会化されてゆく段階を無視しているようにも思える。

このような点も踏まえた上で、今後もドレイファスの議論をある程度継承してゆくとするなら、むしろ、ドレイファスの注目する「検索」技術だけでなく「カスタマイズ」技術という趨勢とあわせて考察する必要がある。⁽¹⁵⁾ 現代においては、ウェブ上では様々なサービス化が行われており、SNSに見られる大規模なカスタマイズサービスの利用者数が劇的な増加をみせている。SNSでは個人個人が登録することで自分の部屋やページを持つことができる。つまり、SNSではあらかじめ決められた項目に登録情報を記入して、しかも登録後も「日記」「趣味」「コミュニティ」など決められたフォームに記入してゆくことで、コンテンツが増加してゆく。こ

れはまさに、専門的なタグの知識がない状態で、個人の簡易サイトを構築する技術であるが、同時にサービス提供者の視点から見ると、決められたフォームに齊一的に記録されたデータベースが構築可能なこととなり、これが検索技術と結びつくことになる。そして、齊一的に整備されたそれぞれのデータをマッシュアップ（関連付ける）ことで、日記や趣味に応じて他者の日記やニュース、広告までを連動させることもできる。むしろ、このような技術が利用者の現実を構成してゆくこととなれば、人間の自由意志や、主体的な情報検索という分かりやすい人間観は揺らぎ、技術も倫理的、政治的に批判される側面をもつであろう。

本論では、これ以上議論を拡散させることは控えるが、それに次ぐドレイファスの議論では、電子メディアによる身体性の表現不可能性やそれを利用することによる身体性の喪失に注がれている。むしろ、喪失したところからたち現れてくる新たな身体性について論じることは今後の研究領域として余地があるのではないかと思われる。

3. メディア技術の特性 技術論の特殊としてのメディア研究

本論ではインターネットについての近年のドレイファスの議論に至ると、やや批判的な立場を表明してきたが、ドレイファスの一貫した態度から人工知能批判（コンピュータには何ができないか）にとどまらず、科学技術論、文明論的な洞察を経て、さらに果敢に現代のインターネットについての考察（インターネットには何ができないか）を展開する態度には肯首せざるを得ない部分も多い。このような技術論一般からメディア研究に大胆にアプローチしてゆく際に問題となる論点を最後に一つ示しておく。これは技術論一般においてメディア論を従属させたり、二つの立場を暴力的に抽象化、同一化させるものではない。むしろ、それぞれの認識論がどのような問題意識のもとに成立しているかという差異を認識することで、議論の相互参照を促進する一助となるであろう。

この二つの概念の差異を把握することとは、メディアの技術的特性を把握し、「普遍」でなく「特殊」の認識論としてメディア研究を把握することであり、これは学問的認識のコンテクスト性を反省することでもある。実際、技術論や技術哲学という形で、西洋形而上学を遡行するならばその歴史は非常に長大なものとなる。一方で、メディア研究を仮に大戦中のプロパガンダ研究などのマスコミ研究をメディア研究の本格化とみなすと、その差は歴然である。仮にさらに起源を遡行したとしても群集や大衆社会論との緩やかな関連が示される程度である。しかし、ドレイファスがコンピュータに対する社会的認知や妄想が膨らむ時期に人工知能批判をおこなったことが誠に時宜を得ていたように、メディア研究もその時代時代の先端メディアと社会現象に対する強い問題意識が介在する。このような現象を把握するには一般化理論よりもメディア論固有の特殊な概念装置が開発されることも想像に難くない。では、その技術的特性とはどのようなものであろうか。

情報化はメディア技術の発展に大きく貢献しつつも、「技術において技術そのものが語られる（表象される）」という特殊な構造を内包している。このように把握するとメディア技術は

「媒介するもの」であると同時に「媒介されるもの」でもある。一例として、テレビのニュースで新しいメディア技術が語られ、それが時に自明のものとして社会的に受容される様な場合がこれに相当する。

このような自己言及的な機制（メディアによってメディアートされるメディア技術の構図）について、より卑近な例を挙げるなら、「2011年のアナログ停波」やそれに伴う「地上デジタル放送への完全移行」のアナウンスが挙げられる。実際の移行については様々な異論や批判が噴出（それは技術的というよりは政治的な問題として顕在化）しているが、当のテレビ放送においてはそうしたアジェンダは設定されることは稀有であり、目下「高精細放送への切り替わり」が自明で必然のものとしてアナウンスされている。これに加え、日本のデジタル放送は世界的に見ても非常に特殊なライセンスポリシーを内包すると同時に、放送業界－視聴者図式の構図では捉えられない利害関係が発生している。さらにこれは、放送業界といえども、ハードウェアの「開発主体」と「放送事業主」では言い分が異なる。録画機（ハードウェア）の開発側から見れば、コンシューマーにとってはできる限り制約が少ない仕様にしたがって技術的に実装することが、ハードの売り上げ向上を期待できる。また、録画機についてはCMを自動的にカットする機能は利用者には喜ばれるが、場合によっては自社の広告映像すらカットされる可能性をもつこととなりここにジレンマが生じる。この例をみても、ひとつの技術が様々なステークホルダーを抜きに存立し得ない状況になりつつある。これは、個人あるいは組織的な法人格にせよ、ひとつの主体による予期だけでは殆ど社会・技術の予測性を持たないということでもある。

そして、本論において重要なことは、どの言い分が正当であるかを判断することだけでなく、先に指摘したような「技術において技術が語られる」というメディア技術において顕著な技術特性へ着目することである。マスメディアと呼ばれるメディアがマスメディアに発展する際には、このような「媒介し／媒介される」作用により社会化される社会機制を抜きには困難である。

一方で、このような言説の成立はマスメディア産業に固有なものでもない。たとえば、携帯電話についても音声通話以外のパケット通信に依拠した様々なサービスがメディア像（＝使い方）として表象されている。また、ネット技術一般をみると「web 2.0」が論じられることが多くなったが、厳密に捉えようとすればするほど実態も定義もはっきりしない。こうした概念は当初はウェブサイト製作者たちの間で新しいサービスを構築する際のジャーゴン（jargon）として使用されていたものであり、必ずしもネット化のスローガンや情報社会論のために作られた実態のある言葉ではない。むしろ、専門家間でのジャーゴンが一人歩きして、さも技術的な実態が実在するかのように広められることになった。

したがって、Web2.0について実態や定義がはっきりしないことをもって「スローガン」に仕立てた「媒介者」を批判することは妥当性があるとしても、「技術者」を批判することはこの場合難しい。この様な例を考慮するなら、「開発と普及」は分かちがたい側面もあるが、ひとまず

区別されるべきものであろう。このように技術化に際しては、多元的で時に重層的な決定によりいくつかの段階を想定して評価される必要がある。

今日では、技術の開発とともに様々な技術の未来予測などの形式で様々なユートピアやそれを批判するディストピア像が提示されるが、その際に技術的に困難であるのか、それとも社会的な普及において困難であるのかによっても、議論は異なってくる。前者は仮に「現段階において不可能であっても将来的には可能」であるとして、常に将来へ引き伸ばしつつ、技術による一種の超克史観を前提する。後者については、先ほどの放送のデジタル化についてもそうであるように、技術の未来については様々な利害や普及などの社会的要因も関連しており、そのような言説にしたがって実現されるとは限らない。⁽¹⁶⁾ まさにそれゆえに、技術的なヘゲモニーを掌握するために様々な技術観が提示される。

ドレイファスの議論を再度参照するならば、この点でメディア技術の「特殊」な側面を等閑視しており、これが良くも悪くも一本槍な論調（合理性批判）となっていることは否めない。それは、技術の表象性に対する洞察がやや欠けているということであるが、技術の表象性（それは社会的・歴史的存在である）から自由になることはメディア技術においては特に看過できないものであり、批判に際してすら普遍的に扱うことは難しいものである。そして、その表象性ゆえに情報社会論は様々なユートピア／ディストピアが示されてきたのであり、メディア技術史はこのような表象性を抜きには記述が不可能とすらなりつつある。

4. 結論と展望

本論の総括とともにメディア研究における意義を最後に示す。本論は、ドレイファスの議論を参照しつつ彼自身の現代のネット技術批判の盲点を示した。ドレイファスの議論はメルロ＝ポンティやハイデガーを参照しつつ、かつての計算機科学における大きな潮流でもあった人工知能や知識工学を批判した。それはかつて西洋哲学が直面したアポリアに自然科学者と人文科学者がそれぞれの立場から真摯に議論を行った痕跡であるといえなくもない。

このことは本論において序盤でも確認したとおり、一定の役割があったことは疑い様の無い事実であろう。人工知能研究者からの全面的な同意を得たわけではなかったにせよ、無視できない言説であったことは間違いない。その後の認知科学などへの受容などもあり、アメリカの哲学者という独自の立場から上述の大陸系の思想家を踏まえつつ「世界内存在」という概念で独自の解釈学を転回させていることも、かつての議論の延長上に隙無く展開しているかに見える。むしろ、こうした議論において、現代の情報技術、さらには技術一般にまで議論の範囲が及ぶことで、単なる技術批判を超えた社会論や文明論的な色彩が濃厚になっている。

その後の現代批評とも言えるネット社会論については、やや問題を含んでいることを指摘した。インターネット検索技術の混乱や社会化を考慮した場合、ドレイファスの言うような形式主義による批判とは別の課題を抱えつつある。ここに、現代のインターネットの検索技術上の理念が存在するとすれば、かつての荘厳な知識の構造化から、半ばあきらめに近い割り切った

態度に漸近する。むしろ、ドレイファス自身が「誇大宣伝」として論じているように、宣伝者、媒介者をより明示して議論する重要性も指摘できよう。その際に、メディア技術が技術論一般とどのような差異をもつかを踏まえた上で、情報化は何を媒介しているかという考察をおこなった。それがメディア技術における「語るもの／語られるものとしての両義性」であり、表象的側面である。

また、ドレイファスは近代的、西洋形而上学的な伝統を批判する一方で、このようなポストモダニズムにも相当の違和感を持っている。これは、特に近年の議論の中で幾度にもわたって批判がなされている。⁽¹⁷⁾ 本論では、この点についてこれ以上の議論は控えるが、ドレイファスをめぐってポストモダニズムとの距離感や批判箇所をもとに議論を検討することは非常に重要なことと思われる。特に、今日ではメディア研究において「ポストモダン」な態度をとることは、日常的な規範と化しつつあった。さらに、社会的実態としての〈ポストモダン〉が進行することは、ドレイファスの議論に欠落（あるいは等閑視）している視点であると指摘してきた。このような軸を設定すると、ドレイファスの立脚点は、かつての西洋形而上学的合理主義との対立だけではなく、ポストモダニズムとの対立も加わり、複雑に錯綜しつつあるといえる。メディア研究や情報社会論の文脈ではこのようなポストモダンな言説は合理主義を普遍的に駆逐するかの勢いで流布したが、このような議論を含めた情報社会論の構図も今後の課題として検討を要すると思われる。

【脚注】

- (1) Dreyfus (1979) [邦訳, 122頁]
- (2) たとえば、西垣 (1994)。人工知能研究は日本においては、80年代に国家プロジェクトの域にまで高められ推進された。
- (3) ウィーナーは戦後の情報科学において、政治的な悪の象徴的存在として当時のマッカーシズムを再三批判している (Wiener (1954))。
- (4) Dreyfus (1979) [邦訳, 391頁]
- (5) Dreyfus (1979) [邦訳, 427-428頁]
- (6) ドレイファスに従うと、錬金術師が残したものは錬金術ではなく、「炉」や「レトルト」, 「坩堝」であり、現代において人工知能研究者は「アセンブリ・プログラム」「デバッグ・プログラム」「プログラム編集プログラム」を残したという。これは多分に皮肉を含んでいる。
- (7) 例えば門脇, 信原編 [2002] におけるドレイファスの議論など。
- (8) Dreyfus (2001) [邦訳, 23-24頁]
- (9) これはかつて、人工知能批判の際にも類似の批判がなされていたことを想起させる。たとえば、「人工知能の開発が高度に実現されたとしたら、責任についての帰責問題はどのようになるのか」という議論である。現代のコンピュータプログラムにおいても利用上の約款において免責事項は明記されるが、これらのプログラムと比較しても、システムの予測不可能性は増大する場合も想定される。
- (10) Dreyfus (2001) [邦訳, 30頁]
- (11) Dreyfus (2001) [邦訳, 34-35頁]
- (12) Dreyfus (2001) [邦訳, 16頁]
- (13) なおWaSPの活動に関してはオンライン上に色々な資料があるが、出版物としては主導的役割を

- 果たしているJ. Zeldman (2003) に詳しい。またWaSP (The Web Standards Project)に関しては、公式サイト (<http://www.webstandards.org/>) で情報を得ることが出来る。
- (14) Web standardsと比較的親和性の高いブラウザ (CSS周りのコーディング解釈など) としては、オープンソースブラウザのmozilla firefox, MacOSではsafariなどが挙げられる。
 - (15) Web standardsにおいてはマークアップやメタ情報の適切な付加が推奨される。こうした構造化も背景にセマンティックwebなどが提唱されているが、中にはあたかもウェブが意味を解する (セマンティックレベルで) と説明するものも多い。アナロジーにしても、確かにこれはハイパーリンクに関する誇大宣伝といえるかもしれない。
 - (16) したがって、前者は技術的な実行可能性について、後者は政治的・倫理的な問題に関わることが多い。これは、原発技術が「安全でクリーンな技術」と喧伝されたところで、矢継ぎ早に事故が生じるようではそのような言説を鵜呑みにするわけにはゆかない。これと同様に、デジタル放送がどれだけ便利であると伝えられても、実際に家庭に導入してみると法的に認められているはずの「個人的利用の範囲」であるにもかかわらず、これまでに無いほどのライセンスポリシー上の制約が課されることとなれば普及は鈍ることも考えられよう。
 - (17) Dreyfus (1997) ではポストモダニズムのメディア研究者としてタークルを批判している。

【参考文献】

- 1) 門脇俊介, 信原幸弘編, 『ハイデガーと認知科学』 (産業図書, 東京), (2002).
- 2) 西垣通, 『ペシミスティックサイボーグ: 普遍言語機械への欲望』 (青土社, 東京), (1994).
- 3) Dreyfus, Hubert L., "What computers can't do: the limits of artificial intelligence", Harper & Row, Publishers, Inc., (1979) (= 黒崎政男, 村若修訳『コンピュータには何ができないか: 哲学的人工知能批判』, 産業図書, 1992.)
- 4) Dreyfus, Hubert L.: "Being-in-the-world: a commentary on Heidegger's Being and time, division I", MIT Press, (1991) (= 『世界内存在: 『存在と時間』における日常性の解釈学』 (産業図書, 東京), (2000).)
- 5) Dreyfus, Hubert L.: "On the Internet", Routledge. (2001) (= 石原孝二訳『インターネットについて: 哲学的考察』, (産業図書, 東京), (2002).)
- 6) Spinosa, C., Flores, F., Dreyfus, H.: "Disclosing new worlds: entrepreneurship, democratic action, and the cultivation of solidarity", MIT Press, 1997.
- 7) WaSP (The Web Standards Project) <http://www.webstandards.org/>
- 8) Wiener, N., "The human use of human beings: cybernetics and society", Da Capo Press, (1954) (= 鎮目恭夫, 池原止戈夫訳『人間機械論: 人間の人間的な利用』 (みず書房, 東京), (1979).)
- 9) Zeldman, Jeffrey, "Designing with Web Standards", New Riders Pub. (2003) (= 石田優子, ソシオメディア 訳『Designing with Web Standards—XHTML + CSSを中心とした「Web標準」によるデザインの実践』, 毎日コミュニケーションズ, (2004).)